

第1、 近況、雑感

1. 重くて黒ずんだ積雪が解けて、いつもより同時早咲きの本社ビル前の琴似川の公園の梅も桜も緑一色となり、35年育てた満天星つつじも白い房をつける、さわやかな5月が来ました。さわやかとは俳句では秋の季語ですが、北国の雪の重圧から逃れた気分は、さわやかが似合うように思います。
2. 5月1日は「水俣病公式確認」から70年、公害被害の典型として扱われながら、被害者は救済されないままに高齢と死に直面している。「高度成長の大変なつけ」と言い切った裁判長の言葉だけが残った企業の悪の多面体の水俣は、このままでは終わらない、終われない日本人の、否、全世界の汚点として、公害問題の原点として後にも思いおこすことを忘れてはならない。
3. ロシアがアフガニスタンのことを棚に上げて、米のイラン攻撃の批判を論難する向きもあるが、トランプのイラン攻撃から3か月を越え、トランプがイランに戦いを仕掛けてこなければ、タンカーもこれまでどおりホルムズ海峡をゆるやかに航行し、世界の不安も起きなかったとは誰にも明白で、トランプカードもジョーカーを失い、終末を迎えているのではないか。
4. この混乱の原因は、トランプのウクライナ救援の失敗と中国とのレアアース禁輸問題の失策に対する一種の目くらまし(陽動作戦)とするエマニエルトッドの見方には、正鵠を得た部分が多く含まれていて、すでにトランプは「敗北大統領」とまで言われています。
5. 間もなく90歳、「九拾歳、何がめでたい」と老人たちに活をいれた 佐藤愛子さんが死去、102 歳。見事、これぞめでたいと称えたい。正に「戦いすんで日が暮れて」の感。同じ位多読した女流作家 瀬戸内晴美には会いに行ったが、北海道に別荘のあった愛子さんには会うことがかなわなかった、残念。
6. この月報も今月で終わりとするにあたり、一言。世界がこんなに荒れ狂っているのに、日本はどうして平和の実現に出向かないのか、戦争が世界中で一番嫌いな(はずの)日本こそ仲介役を果たせるのではないか。消費税1%・0%などはアトにして今すぐ世界平和の実現に出張るべきではないか。少しの間でしたが、お目どおしいいただきありがとうございました。老人の小言はこれで全部オシマイ！

第2、 今月の報告文

- ・「熊の言葉が分かれば」 河谷史夫 (2026.6 本に会う 選択)

第3、 今月の再読本

- ・「死ぬまでになすべきこと」 子供や配偶者はあてになりません
(武田和子、1992.12.8、主婦の友社 1,300 円)
- ・「生の時 死の時」 人びとはいま〈死〉とどのように向き合っているのか…
(共同通信社、1997.10.16、共同通信社 1,900 円)
- ・「生と死をめぐる旅へ」
(吉田敏浩、2003.3.15、現代書館 1,800 円)
- ・「よく生き よく笑い よき死と出会う」
(アルフォンス・デーケン、2003.9.20、新潮社 1,400 円)
- ・「死について！」 あらゆる年齢・職業の人たち63人が堰を切ったように語った
(スタッズ・ターケル、2003.9.24、原書房 2,800 円)

第4、 今月のことば

- 金ではなく、自分の目や舌で良いものを見つける快樂こそ、老後の特権です。(種村季弘)
- 人間、なんか悪いことをやってないと、精神のバランスが崩れてきちゃうんだ。(小沢昭一)
- 夜明けの山は、死からの甦りですよ。大音響とともに立ち上がってくる。(白川義員)

2026 年 5 月 30 日

サンケン環境株式会社
代表 山形 健次郎
(携帯:080-5538-2918)